記念館会報　Vol. 23　　2018. 11. 28

NPO
中帰連平和記念館
CHUKIREN HEIWAKINENKAN

兒嶋俊郎・中帰連平和記念館理事を追悼する

松村高夫・中帰連平和記念館理事長

兒嶋俊郎さんは、韓国で開かれる学会「第 33 回　韓日経済経営国際学術大会」（2018 年 8 月 20 日～ 22 日）に参加・報告するために前泊した 8 月 19 日、成田のホテルで夕食をとり支払いをするときに倒れ、救急車で病院に運ばれるも、3 時間後に急逝された。病名はくも膜下出血。享年 63 歳。早すぎる死である。帰国後 8 月 25 日には松村ゼミ OB/OG 会に出席し、翌日 26 日には平和記念館の理事会に参加する予定であった。

ゼミ OB/OG 会にきた人の半分ぐらいが兒嶋さんの急逝を知らなかった。私はそこに出席したゼミの OB/OG に配ったレジュメのなかで「兒嶋俊郎くんの急逝を悼む」として急逝の報を受けて強い衝撃にとらわれていると書いたあと、次のように続けた。「解学詩先生を中心とする長春の社会科学院満鉄資料館のグループとの７３１細菌戦部隊や満鉄に関する日中共同研究でしばしば一緒に中国を訪問した。最近 5 年間は中帰連平和記念館理事として、また、『米国の原爆投下の責任を問う会』の運営委員として社会活動にも積極的に関わり、その真摯かつ誠実な行動は、周囲の仲間から尊敬の念を一身に集めていた。ABC 兵器にかんする研究論文も次々に発表し、注目を集めていた最中の急逝である。反戦平和の運動は君をまだ必要としている。先にひとりだけ逝くなんて許されない。もう一度戻ってきてくれ、と悲痛に叫んでいる自分をコントロールできないでいる。（8 月 24 日）

9 月 29 日、相模原の山深いところにある相模野霊園において行われた四九日に列席したが、祭壇に置かれた兒嶋さんの遺影をみても、まだ亡くなったという実感はなかった。

兒嶋さんの長岡大学の彼の研究室とマンションにある蔵書は、間もなく破棄されるときいて、急遽私を含め 7 人が 10 月 8 日長岡に行き、11 日まで 3 泊して約 1 万 5 千冊の蔵書と貴重で膨大な資料を選別し、ダンボール 240 箱に詰める作業を行なった。翌日その箱は 4 トン積みトラック 2 台で埼玉県毛呂山の篤志家の家屋に運び込まれた。これを整理して「兒嶋俊郎文庫」とす

目　　次

・兒嶋俊郎理事を追悼する ･････････････ 1
・兒嶋先生の御謙虚さと中帰連記念館 ･･ 3
・「兒嶋先生を偲ぶ会」 ･････････････････ 4
・「髙橋哲朗さんを偲ぶ会」 ･････････････ 4
・「平和のための博物館市民ネット
　　全国交流会」参加 ･･････ 5
・「戦争遺跡保存全国ネット」参加･･････ 6
・「記念館資料室から」 ･････････････････ 6
・次回「中帰連に学ぶ会」 ･･････････････ 8
・「供述書を読む会」発足･･････････････ 8
・「総会と会員制度」につて･･････････････ 8
・「会員制度と総会について」 ･･････････ 8

ることにしている。満鉄史および満州史一般を学ぼうとする市民・学徒には、欠かすことのできない文庫になるだろう。「兒嶋文庫」の設立・維持のための基金はこれから集めることになるが、一体その文庫の目録づくりという労苦の大きいしごとは誰が引き受けてくれるのだろうか。それは兒嶋さんしかいないと思って、ひとり苦笑してしまう。かように彼が亡くなったという実感がないのである。

弟の秀之さんの話では、兒嶋俊郎さんは生まれたとき胃に穴が開いていて３日と命がもたないだろうといわれたという。そして緊急手術は奇跡的に成功したが、医者は 20 年後にまた穴が空くだろうと予言した。不幸にして医者のいうとおりになり、彼は慶応大学経済学部 1 年のとき、胃に穴が空き、胃の全摘手術をした。学部 2 年生のとき私の担当する自由研究を履修し、3・4 年生のとき私のゼミナールに入ってきた。顔はいつも青白く、身体は痩せていた。だが、どこにそのエネルギーがあるのかと思うほど、大変な勉強家でいつも図書館に夜遅くまで残っていた。部厚い「満鉄改組問題」についの大作を卒論として提出し、大学院に進んだ。

彼が大学院生のとき、忘れもしない 1983 年秋のある日の昼下り、私の自宅に兒嶋さんから一本の電話が入った。「今、神田の古本屋にいるのですが、店のダンボールを開けると７３１部隊の人体実験の資料らしいものが入っています。どうしたら良いでしょうか」との電話。私は「慶応大学の図書館に買ってもらおう。値段はいくらですか？」「今ダンボールは店に着いたばかりなので値段がついていません。」店主に値段をつけてもらうと 2 箱で 70 万円だという。すぐに購入することにした。

（長岡大学の「兒嶋研究室」）

私は数人からなる７３１部隊の研究会をつくり、1 年後の 1984 年 8 月 15・16 日に『毎日新聞』に人体実験の報告書を公表した。ハルビン郊外平房にある７３１部隊では、少なくとも 3000 人の中国人などが「マルタ」と称され、1 本 2 本と数えられ、日本の医者により細菌兵器の製造のために人体実験の対象とされ、全員が解剖台の上で露と消えた。ペスト感染蚤は石井部隊が発明した細菌兵器で、1940 年から 42 年にかけて中国十数都市で飛行機から散布されるか、地上で撒かれ、真っ黒になって死ぬペスト患者を多数生み出した。『毎日新聞』での公表は国内外で注目され、中国からはハルビンにある７３１部隊跡に見学に来ないかという招聘状が届き、85 年 3 月、私達の研究会の 5 人が初めてハルビン・平房を訪れた。部隊で働いていた中国人労工の聞き取りを整理したのも兒嶋さんであった。その時から延々 35 年間、兒嶋さんを含め私達の研究会は７３１部隊と細菌戦の研究を行い､少し遅れて満鉄の研究が加わった。

７３１部隊は、戦後自衛隊ができると衛生学校に継承されていった。防衛省は、世田谷区にある自衛隊衛生学校が刊行した『衛生学校記事』の開示を求める運動が起こると、兒嶋さんは防衛省内で行われた開示を求める交渉にも参加した。舌鋒鋭く防衛省側を問い詰める兒嶋さんの姿は、今も私の脳裏に残っている。

さらに兒嶋さんは、戦中の C 兵器 Chemical　Weapons ＝化学兵器・毒ガスの研究から戦後の自衛隊における化学学校の毒ガス研究にすすみ、ここでも防衛省が公開しようとしない『化学学校記事』をめぐる裁判の原告を積極的に支援した。最近 3 年間は A 兵器 Atomic　bomb ＝原爆と核兵器の研究まですすめ､「米国の原爆投下の責任を問う会」の会の運営委員として活躍していた。こうして、兒嶋さんは ABC 兵器の全てに関わり、「７３１部隊・細菌戦センター」のメンバーとして、また、「ABC 企画委員会」のメンバーとして地味な運動を粘り強く行ってきた。

また、中帰連平和委員会理事としての兒嶋

さんの貢献も大きい。理事会のときも会議中パソコンをたたき、数日後には理事会記録が出来上がってくる。長岡に彼の本と資料の整理に行く車のなかで、記念館事務局長の芹沢さんが言った。「長岡ー鶴ヶ島のこの長い高速道路を、兒嶋さんは車を運転してよく来てくれましたねー。何回ぐらい往復したんですかね？」　私は「5 年間ですから、50 回ぐらいですかねー。それにしてもたいへんだったでしょう。」と応じた。彼のマンションを整理していたら、車の雑誌がたくさん積まれていて車の運転が大好きだったことがわかり、少しばかりホットした。

長岡大学の同僚だった権先生に伺うと、「兒嶋さんは毎日夜遅く 9 時 10 時まで研究室の灯がついていました。土・日も灯がついていました。成田に行った前日も遅くまで研究していました。」私は、マンションに整理にいって、兒嶋さんの生活の中心は研究室にあり、ここは眠るだけのところだったのがよくわかった。

真摯に研究をつづけ、市民運動にも積極的に関わっていくという兒嶋さんのような人間が、私のゼミから輩出してことを限りなく誇りに思う。お世話になったこともたくさんあった。ありがとう。そして、さようなら。

（研究室の「椅子と机」）

兒嶋先生の御謙虚さと中帰連平和記念館

石田隆至・張宏波

兒嶋俊郎先生の急逝は本当に突然のことで、今も思い起こす度に言葉にならない複雑な感情が離れません。御本人不在の表現であまり使いたくない言葉なのですが、日中友好にかかわる一人の人間として、また中帰連平和記念館として、貴重な方を失い、もったいないという思いでいっぱいです。在りし日のお姿のなかで、特に印象深い点をエピソード的に振り返る形で、追悼の思いを表してみたいと思います。

一つは、記念館所蔵の藤井資料の整理を何度か御一緒するなかで感じた歴史研究者としての態度や御姿勢についてです。大量の資料を前にしてその価値を即座に判断される御見識の広さはいうまでもないことですが、資料に向き合う御姿勢が特に印象的でした。その資料が、御自身や記念館の興味関心からどんな価値を有しているかを判断されるだけでなく、異なる立場の人々にとってのその資料の意味や、未来の世代にとってどんな可能性を有するのか、という点にまで思いをめぐらせながら、一つ一つの資料について丁寧に語って下さいました。この点は、皆様もよく御存知の、普段の兒嶋先生のお姿、つまり、御謙虚でどんな意見にも耳を傾け、対話しようとされる振る舞いそのものでもありました。これは、2016 年 11 月の「中帰連平和記念館 10 周年記念行事」の準備のための議論の中でも感じたことです。違う立場や異なる意見を大事にして、理解しようとされるその御姿勢は、記念館にとっても、その研究活動にとっても、学び、引き継いでいきたいと思っています。

二つ目に、2015 年、2016 年と二度にわたって、中国で中帰連に関する国際会議などで御一緒しました。中国からの様々な参加者からの報告を熱心に聴き、詳細なメモを採っておられました。報告の内容については、良い点も問題点も率直に話して下さいました。特に忘れられないのは、最初聴いた時にはどう

理解すればいいのかと感じられる内容や雰囲気について、御自分の価値判断や経験から即断してしまうのではなく、被害国の背後にどんな声があるのかを聴き取ろうとする機会として捉えていらした御姿勢です。これは、中国との平和友好を追求する個人や団体として、決して忘れてはいけない点だと、いまの社会状況を見る中で、あらためて感じています。

最後に、個人的なエピソードになりますが、私たちが各地の中帰連当事者の方を訪ねてお話を伺ってきた内容について御報告する機会があったとき、兒嶋先生はいつも新鮮な驚きをもって耳を傾けて下さいました。その際、「私は中帰連については、これから勉強していかないといけないのですが・・・」と、謙虚に御自分のことについて前置きされてから、「そんなこともあったんですか！」と、とりわけ帰国後の中帰連の方々が経験した社会的、政治的圧力の実状には驚かれていました。深い御見識をお持ちの兒嶋先生でさえ、想像が及ばないような経験を中帰連の方々がされていたことを私たちもあらためて認識する機会になりました。兒嶋先生のお姿を思い浮かべながら、今後も中帰連と戦後日本社会のあり方について今後も学び、伝えていかねばとの思いを強くしております。

書きながら、やはりその優しさや人としての大きさがあらためて思い起こされました。

心から御冥福をお祈りしますと共に、無念さを心に刻んでいきたいと思います。

兒嶋先生、本当にありがとうございました！　　（「記念館」理事夫妻）

兒嶋先生を偲ぶ会

兒嶋先生の慶応大学時代の恩師である松村高夫先生（当館理事長）や、当時の「松村ゼミ」の仲間であった北村行伸先生（一橋大学教授）など、松村ゼミ OB/OG 会が中心になり 11 月 10 日に慶応大学で「兒嶋先生を偲ぶ会」が開かれ 40 人余りが参加しました。

（「兒嶋先生を偲ぶ会」慶応大学で）

松村先生の開会挨拶に続き、兒嶋先生の弟さんの兒嶋秀之さんからも兄の思い出と共にご挨拶がありました。その後、当記念館やABC 企画、「米国の原爆投下の責任を問う会」などの市民団体、また元松村ゼミの仲間からも兒嶋先生への思い出が語られました。続く懇親会でも参加の皆様から兒嶋先生の思い出が披露されました。

髙橋哲郎さんを偲ぶ会

既報の通り昨年 11 月、元中帰連事務局長の髙橋哲郎さんが急逝され、先月 10 月 6 日に都内で『髙橋哲郎さんを偲ぶ会』（主催：撫順の奇蹟を受け継ぐ会、中帰連平和記念館、中帰連発行所、再生の大地合唱団）が開かれました。

当日はご遺族を含め、髙橋さんを偲ぶ 60 人余りの皆さんがご参加下さいました。

遠くは「受け継ぐ会・岩手支部」や岐阜支部からも参加、中帰連の映画『日本鬼子』制作の松井稔監督や、フォトジャーナリストの豊田直巳氏などもご参加下さり、「再生の大地合奏団」や「蒙古踊り」も披露されました。

（姫田「撫順の奇蹟を受け継ぐ会」代表・記念館理事）

最初に実行委員長として姫田光義先生（「受け継ぐ会」代表・「記念館」理事・中央大学名誉教授）の主催者挨拶に始まり、続いて、在りし日の髙橋さんの写真や映像が映されました。その後、関係者の皆様が髙橋さんの思い出を語り、最後に副実行委員長の松村高夫先生（記念館理事長・慶応大学名誉教授）が、過日、髙橋さんが感動したシューベルトの『冬の旅』の一節をピアノ伴奏で独唱し、最後にご遺族の姉弟さんからお礼の言葉を戴きました。

お世話になった髙橋さんに、改めて心より感謝と御礼申し上げます。安らかにお休み下さい。私たちは此からも「中帰連」の皆様の体験した平和を求める前代未聞の体験を後世に伝えることを誓います。

「平和のための博物館 市民ネット・全国交流会」参加

毎年開催される「平和のための博物館市民ネット」の全国交流会が、今年は「ひめゆり平和祈念資料館」の担当で 9 月 8，9 日に沖縄で開かれました。全国から 50 人余りが参加し、記念館からも松村理事長以下 5 名の理事らが参加しました。

初日は那覇市内の「ひめゆり学園」（沖縄師範学校女子部と県立第一高等女学校）の跡地の一部を、生き残った彼女たちが買い求めて建てた「ひめゆりピースホール」で開かれました。安斎育郎さん（立命館国際平和ミュージアム名誉館長）の主催者挨拶で始まり、続いて、この春に交代した「ひめゆり平和祈念館」の前館長の島袋淑子さん（元「ひめゆり」隊員）と、新館長の普天間朝佳新館長からも挨拶がありました。館内説明も若い世代に引き継がれました。

（「ひめゆり平和祈念館」で）

（「ひめゆり部隊」最後の地）

その後、8 団体から報告があり「中帰連平和記念館」も松村理事と芹沢事務局長が中帰連と記念館の近況報告をしました。報告の後、「懇親会」に移り各団体との交流があり、地元からは沖縄舞踊も披露されフィナーレは全員で「エイサー」を踊り閉会となりました。

2 日目は会場を南部糸満市の「ひめゆり平和祈念資料館」に移り、祈念館見学の後に 3 団体からの報告がありました。午後は希望者による「フィールドワーク」があり、陸軍病院本部壕跡、ひめゆり最期の荒崎海岸、沖縄最初の埋葬慰霊の「魂魄の塔」などを見学し那覇空港で解散しました。

私たち参加者 5 人は 2 泊延泊し読谷村の米軍初上陸地点、チビチリガマ、4 カ所の「憲法九条碑」（本島に 4 基、離島に 2 基）、平和公園・資料館（平和の礎）、沖縄師範健児の塔などを訪ね、改めて「沖縄の地獄」を再認識しました。

来年の「全国交流会」私たち「中帰連平和記念館」が「丸木美術館」の協力で、来年 10 月 26，27 日に埼玉の「国立女性教育会館」で開催予定です。

（南風原町の「九条碑」）

尚、3 年に一度世界各地で開か

れる「国際平和博物館会議」の事務局がオランダのハーグから、「立命館国際平和ミュージアム」に移転したことも報告されました。

「戦争遺跡保存全国シンポ」参加

当記念館も参加している『戦争遺跡保存全国ネットワーク』の全国シンポジウムが 8 月 18、19 日の両日に、愛知県豊川市の「豊川市勤労福祉会館」で開かれました。

参加者は約 150 人で初日は伊藤厚史さんから「愛知県の戦争記念碑からみた戦争と国民」と題した記念講演や、「戦争遺跡保存全国ネットワーク」共同代表の出原恵三さんの基調報告がありました。

続いて、地域報告に移り最初に地元「豊川海軍工廠跡地保存を進める会」代表の伊藤泰正さんから、「豊川海軍工廠平和公園と保存運動」と題し、20 年余りの運動・努力が実り今年 7 月に「豊川海軍工廠平和公園」が実現し開園した報告がありました。続いて、その海軍工廠が戦争のため一時「天竜峡分工場」として疎開していた報告もありました。

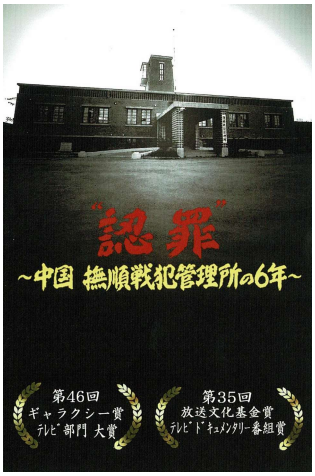
その後、総会が開かれ経過報告、会計報告、運動方針などが提案され承認されました。現在、組織は個人会員 145 人、38 団体との報告でした。

２日目は「保存運動の現状と課題。調査の方法と整備技術。平和博物館と次世代への継承」の三つの分科会に分かれ 16 件の報告がありました。当記念館は「平和博物館と次世代への継承」の第三分科会で、芹沢事務局長が中帰連や記念館の近況などを報告しました。来年は熊本での開催が決まりました。

（「集会」パンフ）

「中帰連に学ぶ会」開催

恒例の「中帰連に学ぶ会」が 11 月 11 日に記念館で開かれました。今回は 98 年に NHK-BS で放送され「ギャラクシー大賞」や「放送文化賞」を受賞し BS で再々放送された『認罪～中国・撫順戦犯管理所の 6 年』(100 分）の上映をし 20 人ほどが参加しました。



この放送は 89 年 8 月に NHK スペシャル・終戦特番で放送された『戦犯たちの告白』（45 分）と共に非常に貴重なドキュメンタリーですが、100 分という長尺番組のためなかなか観て戴く機会がありませんでした。

連載　記念館資料室から

第16回 帰国して1年で迎えた「新しい段階」

石田隆至（「中帰連に学ぶ会」事務局）

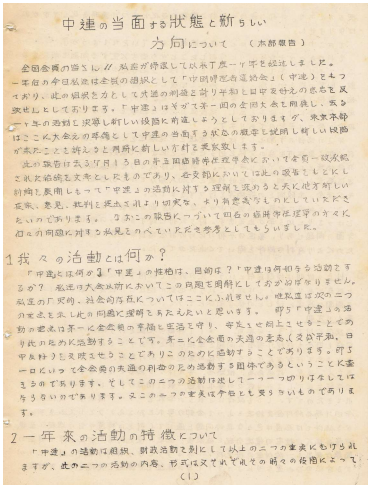
『前へ前へ』第 6 号は、1957 年 8 月 3 日の発行です。同年 9 月の記念すべき第 1 回中帰連全国大会（正式な組織結成大会）の直前にあたり、期待と緊張を伝える内容になっています。とりわけ、冒頭の**「中連の当面する状態と新しい方向について」**と題する長文の本部報告は、その後の中帰連の行方を方向付ける重要な内容を有しています。後半には、各支部や個人からの状況報告や全国大会への要望などが記されています。今回は本部報告を中心に御紹介します。

同報告は冒頭から、帰国一年間の歩みを振り返りつつ、全国大会に向けて、**「新しい段階が来たことを訴えると同時に、新しい方針を提案致します」**と宣言しています。

まず、中帰連の活動の性格や目的が確認されます。**「「中連」の活動の重点は第一に全会員の幸福と生活を守り、安定させ向上させることであり、このために活動することです。第二に、全会員の共通の意志（反戦平和、日中友好）を反映させることであり、このために活動することであります。（略）そしてこの二つの活動は決して一つ一つ切りはなしてはならないのであります。また、この二つの重点は今後とも変わらないものであります」**。この二つの重点をどのように捉えるのかをめぐって、その後の中帰連が葛藤を深めていく歴史を私たちは知っています。帰国一年の段階で、２つの重点が早くも直面した「新しい段階」とはいかなるものだったのでしょうか。

第一の点については、帰国以来求めてきた抑留期間に対する補償要求が、同年７月に「引揚者給付金」の給付が決定されるという形で部分的に実現したことに関わります。一部実現したが故に、全面的な要求を再度提出することが難しくなり、**「多くの国民の支持をうけるすべも少なくなった」**と分析します。要求の正当性は残っていても、**「大きな困難にぶつかっており、長期態勢の方向へ広汎な引揚者、戦争犠牲者と共同の方向へ進まねばならないと考えます」**。

この「新しい段階」に対する「新たな方針」として、生活難が続く状況を前にして、**「従って我々は自分自身の力で相互に具体的な援助活動をおこさねばならない」**と訴えます。具体的には、既に一部で自発的に始まっている、会員間の仕事の連携や共同事業の立ち上げを発展させようと訴えます。**「本部を中心に（会報を利用し、組織の連携を利用し）援け合える仕事を紹介し、人を交流し、物を交流する仕事を手はじめとして、相互に一定の少ない金額の金を出し合い、これを個人特に二人以上協同して事業を経営せんとする人に、有利で貸す（略）等々の活動を起こすのです」**。**「要は大部分の人々に切実な経済利益の問題を新しい方針で解決することを重点工作とし、実際的団結を深めようとするのです」**。


中連の当面する状態と新しい方向について　（本部報告）

全国会員の皆さん！　私達が帰国して以来丁度一ヶ年を経過しました。一年間の今日私達は全国の組織として「中国帰還者連絡会」（中連）をもっており、此の組織を力として戦争の利益と諸り平和と日中友好の意志を反映せしとしております。「中連」はすべて第一回の全国大会を開催し、私達の一年の活動と決議し新しい段階に前進しようとしておりますが、来る本年はここに大会元の準備として中連の当面する状況の観察を説明し新しい段階が来たことを訴えると同時に新しい方針を提案致します。

此の報告は去る7月1日の第五回運営委員会において全員一致承認され此の結果を文書としたものであり、委員部においては此の提案をもとにし討論し長期しもって「中連」の活動に対する理解を深めると共に此方新しい提案、意見、批判を提出され出より切実な、より有意義なものにしていただきたいのであります。　尚この報告につづいて田舎の協議帝国運営の方々に個々の問題に対する私見をのべていただき参考としてもらいました。

1 我々の活動とは何か？

「中連」とは何か？「中連」の性格は、目的は？「中連」は何如なる活動をするか？　私達は大会以前において二の問題を明解しておかねばなりません。私達の厳然的、社会的存在についてはここに示すまでもありません。唯私達は次の二つの目標を共に此の問題に説明を与えたいと思います。　即ち「中連」の活動の意味は第一に全会員の幸福と生活を守り、安定させ向上させることであり此の為めに活動することであり、第二に全会員の共通の意志（反戦平和、日中友好）を反映させることであり、このために活動することであります。即ち一口にいって全会員の共通の利益の為の活動する団体であるということに尽きるのであります。そしてこの二つの活動は決して一つ一つ切りはなしてはならないのであります。又この二つの重点は今後とも変らないものであります。

2 一年来の活動の特徴について

「中連」の活動は組織、財政活動と別にして以上の二つの重点にもどされますが、此の二つの活動の内容、形式は又それぞれその時々の役割によって

（1）

政府からの支援に限界があることを見込んで、自主的な相互援助を発展させようという発想です。管理所での共通体験がベースになっていることは言うまでもありません。しかし、これは後に、中帰連の運命を大きく左右していきます。

第二の重点課題については、帰国直後に**「中国の変化と中国の平和政策の実際を話すことによって」**理解を拡げることは一定の成功を収め、中国人遺骨送還事業では**「どこの団体でもできなかった」**成果を残した、日中友好協会に加入した会員は全体の**「約半数に近い人」**に達した、これらは、置かれた状況や**「条件に合致した適当な活動であった」**ものの、**「この方面の活動も一定の限界に来ており」**、講演をすると警察に睨まれたり、『三光』への圧力を跳ね返して出版を継続させることはできなかった、**「従って、今後の方向として、国民と共にまたは他の平和、日中友好を望む団体と協力してゆくことが大切になりました」**。中帰連が**「独自でやる活動」**には限界を感じていたのです。そこで、**「今日我々は平和を愛する日本人という面から大胆に他の団体と共同し、特に国民と共にこれらの活動をおし進めて行かねばならないと思います」**。これは、中帰連より大きな組織である日中友好協会の中に入り込んで活動していくという、後に繰り返し提案される方向性を先取りしたものです。

こうした「新しい提案」が、直後の全国大会でどのように受け止められたのかを、次回確認したいと思います。

次回「中帰連に学ぶ会」予定

日時：2019 年 2 月 24 日（日）13：30　～
場所：「中帰連平和記念館」
講師：大類善啓さん　　（申込無用・無料）
（「方正友好交流の会」理事長）

旧満州・ハルビン東方 180 キロの「方正」に日本人開拓団犠牲者のために、中国政府が建立してくれた『方正地区日本人公墓』が在ります。

国境付近の開拓団はソ連参戦でハルビンを目指し逃避行を続けました。しかし方正付近で寒さと飢えなどで 3000 人余りが犠牲になり仮埋葬されました。戦後、白骨の山が出てきて、地元政府への「埋葬させて」との残留婦人の要請が、周恩来にまで届き「中国政府がやります」と実現しました。ここには「麻山地区日本人公墓地」と「中国人養父母公墓」も在ります。

（方正地区日本人公墓）

絵・橋本勝

「供述書を読む会」発足

記念館では中帰連の皆さんが、当時、管理所内で書いた「供述書」を読む会を発足させることにしました。

参加ご希望の方は事務局までメールでご連絡下さい。希望者には日程など詳細が決まり次第メールでご連絡させて戴きます。

会員制度と総会について

記念館では毎年春に「総会」を開き、『会報』で報告していますが「総会通知が届かない？」と思っている方も少なくないかと思いますので、改めてご案内させて戴きます。

一般の団体・組織は会費を納めれば総会出席の資格（権利）があるかと思います。

NPO の会員には制度上「正会員」と「賛助会員」とがあり、殆どの皆様には原則「賛助会員」とさせて戴いております。

総会に出席出来るのは「正会員」で、正会員をご希望の方は書面で申請戴ければ原則受け入れられます。但し、総会は「正会員総数の過半数」の出席で成立のため、「記念館」は全国組織のためその旨ご理解・ご配慮戴ければと思います。

毎年、埼玉県と法務局に「事業報告、会計報告、財産報告」など提出しており、記念館の「定款」や会計報告なども埼玉県や記念館の「ホームページ」に載っております。ご質問などあれば記念館までご連絡下さい。

『NPO 中帰連平和記念館』
〒 350-1175 埼玉県川越市笠幡 1948-6
TEL&FAX：０４９－２３６－４７１１
E-mail：npo-kinenkan@nifty.com
ＨＰ：http://npo-chuukiren.jimdo.com/
ＭＬ：npo-kinenkan@freeml.com
郵便振込口座名「NPO 中帰連平和記念館」
振込口座　：００１５０－６－３１５９１８
開館日：「水、土、日」（10:30 ～ 16:30）
（ご来館はなるべく事前にご連絡下さい）